チョッパバマレ（6,109m）東稜登攀

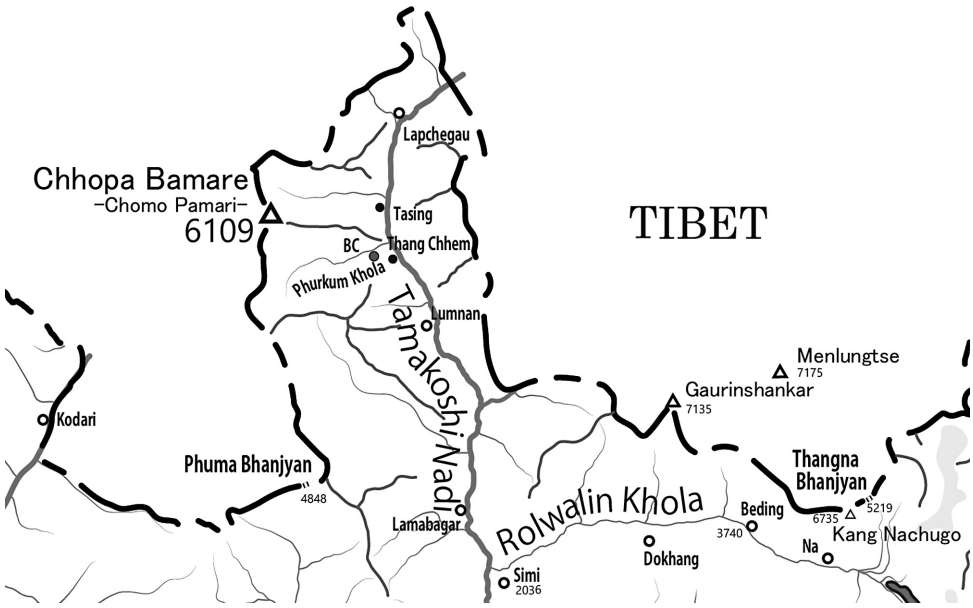
國　宗　広太郎

はじめに

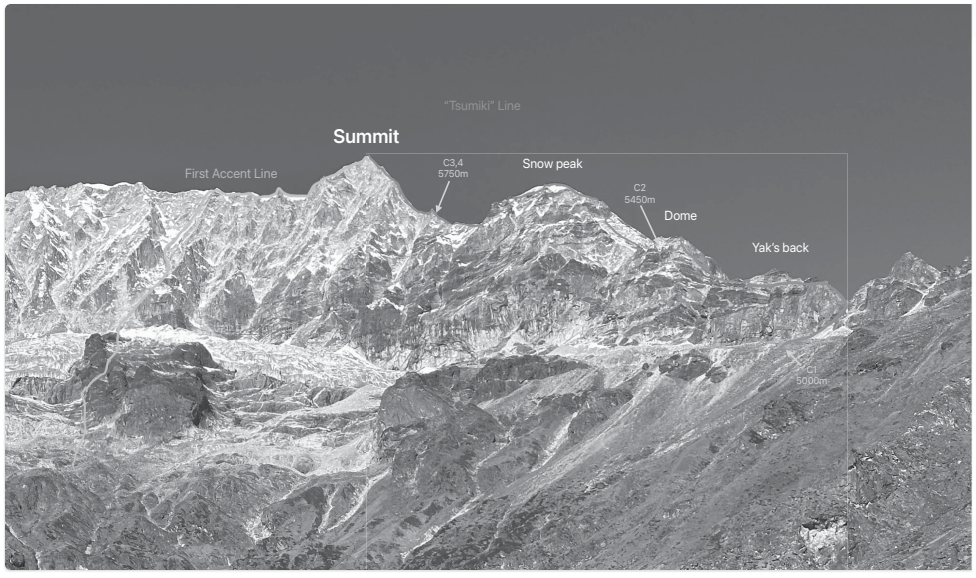
2024年の秋、上田幸雄、馬目弘仁、小西審胤と私はチョッパバマレという山を登るためネパールに遠征し、東稜の登攀に成功した。私にとって初めての海外遠征であり、当然初めての高所登山となった。分からないことだらけで始まった遠征だったが大きなトラブルもなく（熊にBCを襲撃されたことを除けば）順調に楽しく旅を終えることができた。その要因は経験豊富なメンバーに支えられたことにほかならない。遠征を通して新たな発見や想像していたことと違ったことがあった。ここでは登山記録と私が初めてのヒマラヤで感じたことを書かせていただきたい。

チョッパバマレについて

チョッパバマレは、ネパールのロールワリン山群の最西端、中国との国境に位置する山だ。過去に発表された正式な記録は2019年2月にアメリカ人のジョン・ケリーとフランス人のベンジャミン・ビレットのチームによって登頂された。ルートは南東のリッジをクライミングしたのち主稜線から山頂に至るルートで四日間のクライミングで成された。



概念図　　作画：川原庸照 氏



チョパバマレ全景（撮影場所：BCからのアプローチ中でチョッパバマレ南東方面から撮りました。）
作画：小西審胤 氏

ルートの選定

当初の予定は南東壁クライミングして山頂に近いところに向けてダイレクトに登る予定だった。しかし、スコープを用いて壁を観察すると雪や氷が少ないこと、岩質がかなり脆いことが見て取れ、落石の音も頻繁に聞こえる。クライミングをするにはリスクが高すぎると判断した。傾斜が比較的緩く登頂の可能性が感じられる東稜の登攀に予定を変更した。また、アタックのチーム編成にも変更があった。上田・馬目チームと小西・國宗チームの２チームでそれぞれにルート開拓をする予定だったが、上田の体調が高所順応の際に悪くなってしまったため三人組でのクライミングになった。

登山記録

―高度順応と試登―

BCの標高は3,500m。本当はもう少し標高を上げておきたかったがポーターとの兼ね合いもあり比較的標高の低いBCとなった。5,000m地点までは放牧されているヤクの踏み後やモレーンを簡単に歩ける。5,000m地点から東稜の顕著なコルに登り、そこから試登＆高度順化としてクライミングが始まる。スタカットとショートロープを交えてガレ場（「ヤクの背」と呼ぶ）を通過。「ドーム」を４ピッチで登り5,450mをタッチ。この「ドーム」は非常に岩が脆く緊張するクライミングとなった。

「ドーム」からの下降は登攀ラインと違い、落石のリスクがない北東方向に伸びるスノーリッジを懸垂下降した。5,250mまで下降し、そこで一泊して高度順応は終了となった。5,500m以上のところでもう一泊できれば理想的だったが、想像以上の壁の脆さやルートがリッジということから標高を上げづらかった。アタックでの「ドーム」のクライミングは試登した脆い壁かスノーリッジ、どちらを登るか協議した。スノーリッジは登れるか不確定で時間もかかりそうだったので脆い壁を慎重に再登することとなった。

―アタック―

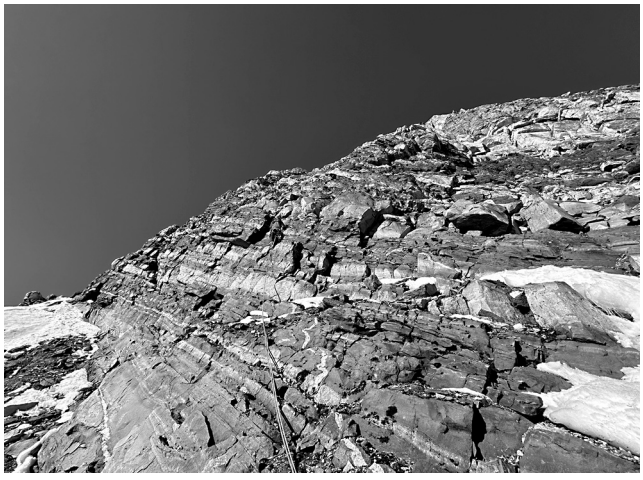
高度順応を終え２日間のレストを入れてからアタックを開始した。登頂まで４日間、下降に１日かかり５日間のアタックとなった。食料はゆとりをもって５泊６日分を準備した。シュラフや防寒着もしっかり持っていきオープンビバークにも耐えられる装備となった。登攀具はカムを２セット、ナッツ１セット、ピトン５本、60mのダブルロープ３本を準備した。捨て縄は有効に使えそうだったので30mを準備した。リッジのルートでアップダウンもあり、ブラインドで先行きの見えない部分も残されているため、対応力に幅を待たせる装備となった。

11月10日　BC → C1（5,000m）

C1までは歩きのアプローチで14時に到着。ゆとりのあるアタック初日となった。

11月11日　C1 →「ヤクの背」→
「ドーム」→ C2（5,450m）

６時に出発。高度順応の際に「ヤクの背」までロープを固定していたのでユマーリング。そこからショートロープで進み、高度順応の時と同じラインをた



ドーム壁のクライミング（撮影場所：ドーム壁1ピッチ目）

どるようにクライミングして「ドーム」を登りきる。試登しているので順調なクライミングとなった。

「ドーム」と「スノーピーク」の間は平らな地形の幕営適地だったのでそこをC2とした。到着時間は13時半と早い時間だったが「スノーピーク」を登りきるまでに幕営適地が見つかるか分からなかったので早めに休むことにした。テント設営＆水作りとルート工作を分業で行い、「スノーピーク」の雪面の傾斜に２ピッチ分のロープを固定した。

11月12日　C2→「スノーピーク」→C3（5,800m）

５時半に出発。固定したロープをユマーリングの後、６ピッチで「スノーピーク」を登頂。「スノーピーク」からコルへの下降は土嚢袋の支点で懸垂下降を１ピッチとスノーリッジをショートロープで慎重に下降した。ここから先の本峰の壁は傾斜が強く時間のかかるピッチが続いた。この日は5,750mまで登り幕営適地がなかったためオープンビバークをすることになった。三人が分散して横になれるスペースを確保した。寒い夜だったが風はほとんど吹かなかった。



スノーピークから見たチョッパバマレ本峰（撮影場所：スノーピーク）

11月13日　C3→山頂→C4

６時に出発。１ピッチ登り先を見ると、下から観察しているときはピナクルに見えていた部分が奥行きのある岩稜であることが判明した。左右に切れ落ち、不安定な岩質の岩稜だ。スタカットで慎重にクライミングを続け上部壁まで進んだ。ここから先は、一番傾斜が強くライン取りが難しいクライミングとなった。馬目の安定したリードで傾斜の強い岩壁と上部に続く雪面を繋げて難所を突破した。その後、２ピッチの複雑な形状の緩傾斜を登り、頂上まで伸びる最後の岩稜に出た。コンテで岩稜を進んでいき、頂上直下の壁を２ピッチで登り本峰頂上に16時に登頂した。



本峰上部岩壁とリッジ（撮影場所：上部岩壁手間のリッジより）

頂上で少し休んだ後、同ルートの下降して20時半に前日にビバークした場所に到着した。連日のオープンビバークとなるが、そこをC4とした。この日も幸運なことにほぼ無風だった。

11月14日　C4→BC

８時に出発。C4からの下降路に難所は特にない。「ドーム」からの下降は高所順応で予習済みなのであまりプレッシャーはなかった。下降用の捨て縄を登攀時にセットしていたこともあり、素早く下降することができた。C1地点に到着したころには夕日が

傾いていたが、おいしい夕飯を食べるためBCまで下降することにした。21時にBCに到着。待機していた上田と現地ガイドに登頂成功の報告ができてうれしい気持ちになった。

初のヒマラヤ遠征で感じたこと・学んだこと

①高度順応について

高所順応で気を付けたことは、こまめな水分補給と無理せず自分のペースを保ち行動することだ。

水分補給に関してはハイドレーションを用いるなどしてペースを乱すことなくこまめに補給することができた。また粉末のドリンクを多く準備することで快適にテント内での水分補給ができた。

歩くペースは、普段の３分の１程度のペースでゆっくりと歩くことを意識した。高所に対する強さは個人差が大きいので、人のペースに合わせずマイペースに行動することが順化の成功につながると感じた。また、起床時に心拍数を測ることで客観的に自分の体調を知る目安となった。

今回の高度順応で私の体に起こった不調は軽度の頭痛と胸の痛みだったが、どちらも標高を下げると回復した。標高を下げる以外には特別なことはしていない。不調になった場合、それ以上は体に負荷を与えず標高を下げて体調を回復させることが重要だと感じた。また、高度順化を念入りにしすぎてアタック時の体力がなくなってしまうことも懸念すべきで、アタックまでの日程と体力や体調のバランスをとることが重要だと感じた。

②クライミングで求められたこと

クライミングにフォーカスして振り返ると、純粋な登攀力が重要だったと感じる。ルート上の各壁の困難な核心部は馬目がリードを担当したのだが、スムーズにペースを崩さず登っていく彼の姿を見てそう感じた。

ルート上の壁は基本的に岩が脆く、登るラインを自由に選べるような壁ではなかった。ランナウトが強いられる場面や、ビレイヤーが落石のフォールラインに晒される場面が続くこともあった。そのような壁では絶対に落ちずに素早くスムーズに登れる純粋な登攀力が、最も効果的にリスクを管理できると感じた。高所でのクライミングは体のタフさや心肺機能の強さが何よりも重要だと想像していた。実際にそれらの能力も重要ではあったが、スムーズなリードでルートを切り開いていったことが今回の登山の成果に大きく繋がった。

日にち	標高	体調の変化
10月27日	キャラバン→3,500m（BC）	好調。
28日	3,500m→4,000m（2.5ｈ滞在）→3,500m	4,000mで頭が重く感じる。
29日	3,500m→4,600m（30m滞在）→4,000m	好調。
30日	4,000m→3,500m	好調。
31日	3,500m→4,000m	好調。
11月1日	4,000m→5,000m（2ｈ滞在）→3,500m	下山途中から軽い頭痛が続いた。
2日	3,500mでレスト	軽い頭痛が続いた。
3日	3,500m→4,000m	頭痛が治まり好調。
4日	4,000m→5,000m	睡眠時、酸素の薄さでたまに起きる。
5日	5,000m→5,250m（30m滞在）→5,000m	酸素の薄さで登るペースが全く上がらなかった。五歩踏み出せば息が切れた。
6日	5,000m→5,450m（30m滞在）→5,250m	深く呼吸しなければ行動できなかった。胸に痛みが出た。
7日	5250m→3,500m	胸の痛みは続いたがアタックまでに治まった。

③国内でのトレーニングについて

チョッパバマレを登るために私が行った特別なトレーニングを特にない。平日はランニングやボルダリングジムで登り、日曜日は山で遊んでいた。長時間行動の日帰り登山は疲れた状態で動き続ける良いトレーニングになった。冬季は休暇が取りやすいので穂高で継続登攀などをしたが、疲労した中でのクライミングとなるので今回の登山に役立った。疲労した状態でも登り続けるようなトレーニングは有効だと感じた。

今後の取り組みとしては、フリークライミングの岩場で登る時間を増やそうと考えた。クライミングを伴う山登りをする多数の人はフリークライミングにも取り組んでいることだろう。しかし、私は乾いた岩でフリークライミングをすることはほぼ皆無だ。日頃からフリークライミングに精を出している馬目や小西と比較して、その経験の差が山でのパフォーマンスに出ることが多くあった。上述した登攀力やルートファインディング能力、下降技術などの習得は、不確定要素の強い山で大きなアドバンテージになると改めて考えさせられた。

④ツアー会社やガイドについて

今回、私たちはコスモアドベンチャーというツアー会社と契約してガイドやポーターの手配や登山許可の準備を進めてもらった。ガイドの存在はとても大きく、私たちとポーターとの仲立ちやキャラバンでの宿の交渉、BCの料理など様々なことをこなしてくれた。高度順応中にBCがクマに襲撃されて（テント一張り全壊、一張り半壊、少量の食料の強奪）登山活動の中止を検討することもあったが、ガイドの説得により登山を続行することができた。

さいごに

今回の遠征は頼もしいメンバー達からの大きなサポートを受けた登山だった。自分の力が山に通用した感覚はあまりない。それでも、この遠征の印象はとても良い。新しい経験を積めて、自分の改善点も見つけられたからだ。なによりも山に登っているときの景色がきれいで単純に楽しかった。それだけでも充分だ。このような経験ができたことも、登山に誘ってもらい支えてくれた仲間や現地の人々のおかげだ。自分の登山にかかわる人々をもっと大切にしようと思ういい旅となった。

行程

10/22　カトマンズ着
10/23・24　カトマンズ　買い出し
10/25　カトマンズ→ランバガー
10/26　ランバガー→ルナン
10/27　ルナン→BC
10/28～11/7　高度順応
11/8・9　レスト
11/10～14　アタック
11/15・16　レスト
11/17　BC→ランバガー
11/18　上田、馬目はランバガー→カトマンズ(23日帰国)
～24　小西、國宗はロールワリンエリアをトレッキング
11/25　ランバガー→カトマンズ
11/26～11/29　カトマンズ
11/30　帰国



熊に破壊されたテント（撮影場所：BC）



熊からBCを守ってくれたガイドのハスタ・ライ（撮影場所：BC）